小竹清水（民話）

神社の辺りは、昔、家や店が建ちならび、にぎやかでした。神社の前で、佐平さんが、ろうそくや線香、わらじ、ぞうりなどを売っていました。店には、「お竹さん」という美しい娘さんがいて、店番をしていました。美しいお竹さんを見ようと、店はにぎわって、お竹さんを知らない人はいないほどでした。

お竹さんは、店に買物に来る「覚了」という若いお坊さんに心をひかれ、だんだん好きになりました。ある日、お竹さんが店番をしていると、覚了さんが買物に来ました。好きな覚了さんに声をかけられたお竹さんは、顔を赤らめてにっこりしました。その笑顔を見た覚了さんは、お竹さんがいっぺんに好きになり、仕事も手につかなくなりました。

二人が仲良くなって、五か月ほどが過ぎたある日、まだ夜の明けぬころに、店の戸をはげしくたたく者がいました。佐平さんが飛び起きて戸を開けると、白ずきんに腹巻きをしめ、手に大刀をもった覚了さんが、息をはずませて立っていました。「大変です。今、知らせによると、越後の上杉謙信が今朝から魚津城をせめています。まもなく、こちらの方へもせめてきます。今度のいくさは城だけでなく、神社や寺まで焼きはらうとのことです。早く安全なところへ逃げてください。私たちは、この神社を命がけで守るつもりです。」と言いました。佐平さんたちは、大急ぎで身の回りの物を背負って安田の山へ逃げました。お竹さんは、山に着いても覚了さんのことが心配で、木のかげから黒いけむりの上がっている方ばかり見ていました。

次の日、村へ戻ってみると、神社はすっかり焼け、残っているのは戦いで死んだ人のなきがらだけでした。お竹さんは、一生けん命に覚了さんを探しましたが、覚了さんは、清水のほとりで死んでいました。お竹さんは、いつまでも覚了さんのそばで泣き続けました。その夜、生きる望みをなくしたお竹さんは、自分の一番大切にしていたふりそでを着て、清水のわき出ている泉の中に飛びこんでしまいました。お竹さんのいなくなったことに驚いた佐平さん夫婦が、清水のところまで来てみると、赤いきれいなふりそでが水面いっぱいに広がり、まるで花が咲いているように見えました。この清水の前に立って「お竹、お竹。」と呼ぶと、それにこたえるかのようにきれいな水がわき出し、お竹さんの美しく悲しそうな顔が泉の底に見えたということです。それから、人々は「お竹清水」と呼ぶようになったということです。

水面いっぱいに広がる赤いきれいなふりそで